

授業形態	講義	科目名	環境共生概論	必選区分	選択
開講学科・学年	大環1年		受講者数	約150名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他（ ）				
どのような方法を取り入れたか	フランスやアメリカの大学における講義の経験をもとにして、フランスやアメリカの女子学生と本学の学生との比較考察を示すことで、本学学生の特性を自覚し、自信とプライドをもってもらえるように試みた。				
取り組みの効果	講義姿勢は日に日に熱心になり、もちろん私語は皆無となった。				
今後の課題	本学の学生の個性と長所を客観的に評価していく工夫を続けたい。				

授業形態	講義	科目名	インテリアデザイン論	必選区分	選択
開講学科・学年	大環1年		受講者数	約140～180名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	<p>当初は自由な雰囲気のなかでの学生の主体性を尊重し自主的な授業参加を期待して座席は自由としていたが、教室内の雰囲気まで自由すぎてしまい、私語が絶えないという状況に陥ってしまった。大人数のため私語をしている学生の特定が難しく、全体に対して注意をしても私語をしている学生は自覚に欠けているためほとんど効果がなかった。</p> <p>この私語対策のため、座席を横一人おきとして隣り合う学生同士の距離をとったほか、教室の前側3分の2の範囲に座るよう指定し教員との距離を縮めた。</p>				
取り組みの効果	<p>この取り組みの効果は顕著で、私語はほとんどなくなった。</p> <p>横一人おきにすることで、隣りに話しかけにくくなったほか、座席間の見通しが良くなり、学生と教員、あるいは学生同士の顔がお互いよく見えるようになったことも私語を抑える効果につながったと考える。また、見通しが良くなったことで、大人数でも私語をしている学生の特定がしやすくなり、効果的に注意することが可能になった。</p>				
今後の課題	<p>私語はしにくいですが、発言はしやすい、という雰囲気をつくるような工夫により、双方向的な授業へとつなげていくことが今後の課題である。</p>				

授業形態	講義	科目名	生活環境英語 I	必選区分	選択
開講学科・学年	大環 2年		受講者数	約 30 名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取り組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取り組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取り組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	時間外学習を促す取り組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取り組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を 取り入れたか	<p>建築デザインコースの学生に、専門性を重視した英語力を身に付けてもらうことが目標。前年度、初めて担当。日本人として、海外の人たちに茶室空間を英語でどう説明するかを一緒に考えよう、と、岡倉天心の “The Book of Tea” を講読した。できるだけ、自力で翻訳に取り組んでもらいたかったが、非常に有名な著作のため、ネット検索で学生たちは、先に翻訳を入手。あまり、構文や語彙に関心を持たない状況が伺えた。</p> <p>その反省から、翌年度（前年度）は、甲子園ホテルを設計した遠藤新の師・フランク・ロイド・ライトの建築論に切り替えた。遠藤が出会ったころのライトの考え方を、本学の学生として、知っておいてほしいと考えたこともある。日本では、翻訳出版されていない論文を “Architectural Record” 誌から抜粋した。</p>				
取り組みの効果	<p>授業が遅々として進まず、予定の分量の半分も消化することが出来なかった。学生の平均的な実力に対して、内容が難しかったためだと考える。結果として、ライトが言いたいことの全貌を読むまでには至らなかった。</p>				
今後の課題	<p>学生の英語講読力には、かなり差があること、専門性の高い文章を読む以前に、基本的な構文を理解し、語彙を増やす必要がある。それらの強化をはかりつつ、建築関連の文章を読んでみる、というバランスを考慮して取り組みたい。</p>				

授業形態	講義	科目名	施設計画論	必選区分	選択
開講学科・学年	大環2年		受講者数	約60名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	<p>・毎回、講義終了間際5～6分を使って、講義の感想、質問・疑問をA4のフォーマット用紙に書かせ回収する。これを出欠の根拠ともすることを事前にアナウンスしておく。</p> <p>・実質、ほとんど何も書いてない人は、欠席扱い（出席しているが聴いていない、学んでいないということ）とすることも有りうるともアナウンスする。</p> <p>・「講義感想」には毎回、簡単ではあるが赤を入れ、コミュニケーションを図るとともに、次回講義の際に、質疑に答える形で、講義の流れをつくっていくことにも活用。</p>				
取り組みの効果	<p>・学生がどのような気持ち、モチベーションで受講しているかがよく判り、こちらのモチベーションもあがる。</p> <p>・ほとんどの人は、しっかりと書いてくれる。赤字で質問に答えておくと、その後の反応もいいようである。</p>				
今後の課題	特になし。				

授業形態	講義	科目名	建築計画Ⅳ	必選区分	選択
開講学科・学年	大環3年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を 取り入れたか	<p>建築計画Ⅳでは個別の建築物の計画について理解し設計に役立てるような授業を目指している。全体としては、机上の知識に終わるのではなく、実際の建築例を挙げ、具体的なイメージができるように心がけている。その中での、図書館計画の内、児童コーナーの理解を深めるのに、図書館で行われる、「読み聞かせ」や「お話の会」をこの授業で実際に行うようにしている。一つには自作の大型紙芝居を上演し、学生に幼稚園児に戻ってもらい、紙芝居の内容に反応すること求め、一緒に紙芝居を盛り上げ、お話を作っていき、その体験を甦らせるようにしている。また、学生にお気に入りの絵本を持参してもらい、書画カメラを使いながら読み聞かせを学生自身で行い、聞き手の反応を直接感じ、読み聞かせの難しさや楽しさを体感してもらうようにしている。</p>				
取組みの効果	<p>知識の取得だけに終わらず、実際にその空間で行われる内容を理解した上で、各部屋の役割を理解してほしいと考えている。興味のある空間の理解が楽しく実感として理解できていると感じている。その空間を使って催し物をする側にもなり、また受け取り側にもなることが、空間の理解に役立ち、建築計画の面白さに繋がっている。</p>				
今後の課題	<p>建築計画の授業すべてにこのような手法をしていたら、いくら時間があっても足りない。学生が自主的に勉強したいと思えるような授業を目指したい。</p>				

授業形態	講義	科目名	建築一般構造Ⅱ	必選区分	選択
開講学科・学年	大環3年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	<ul style="list-style-type: none"> ・折板構造を折り紙で模倣し、その原理を納得させる。 ・学内の諸施設（例えば渡り廊下・同屋根、横断橋など）の架構を観察・スケッチさせて、力の流れを想像させる。 				
取り組みの効果	自らの手を動かし目で確かめることにより、理解は多少促進されていると思われる。				
今後の課題	構造模型等を作成して、提示することが必要かとも考えている。				

授業形態	講義	科目名	生活デザイン論	必選区分	選択
開講学科・学年	大環2・4年		受講者数	約90名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	学期の後半より、μCam上に講義内容に関するコメントを入力してもらい、平常点に加味した。コメント1件につき5点満点で設定した。講義内で学生のレポートの発表コーナーを設けた。				
取り組みの効果	熱心な学生からは頻繁にコメントをもらった。私語は殆どなくなった。				
今後の課題	μCam入力を面倒くさく思い、抵抗する意識が解消できない学生がいた。μCamの不具合も課題である。				

授業形態	講義	科目名	機器分析法	必選区分	選択
開講学科・学年	大環3・4年		受講者数	約35名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	講義内容から、科学に関するある程度の基礎学力が必要である。そのため、講義、次に演習、宿題といった順で易しい問題から次第に難しい問題に移りながら、宿題の解答で理解度の確認を常に行うようにした。間違いやすいところは次回に解説、パワーポイントを用いて復習といったことを繰り返す。一部TAを入れて個別指導。時間に余裕があれば、実際、機器を取り扱ってみる。				
取組みの効果	理解度の遅い学生の理解度は格段に高まったと感じられた。理解度の高い学生は、時間を持って余すといったことも生じているが、友達同士で互いに教え合うところも見られた。TAも有効に機能した。機器を実際使ってみるのが理解度を高めるのに最もよいことがわかった。				
今後の課題	やや丁寧すぎて、シラバスとおりに進行しないという問題点があり、改善しなければならない。				

授業形態	演習	科目名	消費者調査法演習	必選区分	選択
開講学科・学年	大環3年		受講者数	約60名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
<input type="checkbox"/> その他 ()					
どのような方法を取り入れたか	<p>実習・演習科目に関しては、アドビのイラストレーターというアプリケーションを使用して最終報告書を作成することを要求している。</p> <p>本科目は、複数の調査を行い消費者の行動を把握することを目的とした演習で、そのほかにもエクセルなどを使用しているが、報告書は手に取りやすさ、見易さを考慮した上で制作するように指導している。</p> <p>本学科では、1年にイラストレーターの使用方法を学ぶ機会があるものの、その後、使用方法を忘れる学生が多い。できるだけ使用する機会を増やすことによって、せっかくの技術を忘れないようにとの考慮である。</p>				
取り組みの効果	レイアウトを意識して報告書を作成するようになった。				
今後の課題	<p>演習科目にもかかわらず60人程度も履修するため、授業の進行に非常に無理がある。そのためグループワークをさせることによって捕っているのだが、グループワークなどどうしても真面目に作業をする学生としない学生が出てきてしまい、しない学生には何を工夫したところで効果がない上に、目が届かず、かえってサボる癖をつけてしまっている。特に、パソコンを使用した作業となると、教室内ではできず、授業時間外での作業もふえるので、その傾向に拍車をかけているようだ。</p>				

授業形態	演習	科目名	ファッションデザイン演習	必選区分	選択
開講学科・学年	大環3年		受講者数	約10名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を 取り入れたか	<p>この科目は、ファッションデザインという行為について学ぶよう組まれている。授業内容は、トレンドデザインの情報を得て、それを作成するためのパターンづくりを学び、それらを基に市場性のあるデザインを考え、パターン作成を行い、縫製による作品化を行うというものである。</p> <p>2013年度までは、デザイン作業について、机上のみでのクリエイションで良しとしていたが、2014年度ではマーケットリサーチを課題として取り入れた。ファッションデザイン演習内容に相応しいリサーチと、その報告書の作成を時間外学習とし、それら鮮度の高い情報を基にデザイン作成を行うという連続した課題内容とした。それらはプレゼンテーション形式で発表され、他の学生の反応も参考することとした。</p> <p>最終成果物では、評価基準のばらつきを防ぐ意味で、使用テキスタイルを一律にトワル（安価な綿布）を使用し、サイズは基準の寸法としていた。しかし、市場性のあるデザインでありながら、個性のない表現方法では訴求力を欠いた作品となっていたため、2014年度では、テキスタイルの選択も自由とし、作品のサイズも学生の着用品が可能なものとした。</p>				
取組みの効果	<p>上記三点の改善により、学生たちは「ファッションデザイン」がもつ一連の行為について理解を深められたようである。マーケットへは一度ならず、その後も自主的に赴き、トップクリエイターたちの商品を意識的に観察する訓練ができ、情報収集の技術も得られたようである。また、それら一連の作業を発表することで、自身で企画したデザインに責任をもつという姿勢も感じられた。最終成果物では、リアリティのある素材を使用するという点で、学生たちは大変な苦勞をしていたが、作品完成後は大きな達成感を得られたようであった。</p>				
今後の課題	<p>演習の充実度を追求すると、15週では厳しい内容であったように思うが、どのパートも削ることが出来なかったため、課題のボリュームが膨らみ、学生への負担は少々重かったのではないかと感じる。</p> <p>今期は、多彩に組まれたシラバスをいかに15週で完結させることができるかが課題である。また、学生側の充実度を考えると、個別の指導（デザイン・パターン・縫製・発表）が、学生の納得のできる範囲で収まるかも、課題であると考えている。</p>				

授業形態	演習	科目名	生活文化演習 I (旧)	必選区分	選択
開講学科・学年	大環3年		受講者数	約20名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> その他(集中力と問題意識の高まり)				
どのような方法を取り入れたか	共同担当者と隔週2コマでテーマに関してプロジェクトA(実物資料抽出、分類)とプロジェクトB(文献調査)を展開した。				
取り組みの効果	熱心な学生からは頻繁にフィードバックをもらった。積極的な調査を行った。発表会に向けた練習を通じて、プレゼンテーション能力は高まり、講評会での確かな評価を受けた。				
今後の課題	演習の目的は明解に単純に設定する必要があるので、隔週というよりは、前半・後半に分けて運営すべきだろう。また準備・調査の負荷を嫌がる学生に敬遠され、また時間割的に不利な時間帯に割り振られることも相まって、年年歳歳受講者は減少した。				

授業形態	実験	科目名	生活環境科学実験	必選区分	選択
開講学科・学年	大環 1年		受講者数	約 30 名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を取り入れたか	<p>本実験は、2 年次以降の専門の実験科目を受講するために必要な基礎知識や技術（器具の取り扱いなど）を身につけることや実験レポートの作成の基本を学ぶことにある。しかしながら、受講生の中には高校時に化学未履修の学生も多く、初学者を対象としたものであり、レポート作成に関してまったく知らない学生も多く受講する科目である。</p> <p>初回のレポートからしっかりとしたものを作成することは不可能であるため、半期の受講を通して実験終了時点でレポート作成の基礎を身につけることを目的としている。</p> <p>そこで、毎回の実験後に課すレポートについて、全てチェックと修正の指摘を入れ次週に返却することを行った。実験開始時は、様式や書式を守るといった基本的な事項や図表の作成方法を中心に指摘し、これらの点が改善されてくる後半のレポートでは、考察などの科学的な思考を進めていく点を中心に改善を求めた。この過程を通じて、学生が初学者の状態から簡単な実験レポートが書ける段階まで能力を身につけることを目指した。</p>				
取り組みの効果	<p>真面目にレポートを作成し、こちらの指摘に対して改善の努力を行った学生については、ある程度の目標の達成が認められ、次年度以降の実験科目の受講の際に効果が表れるものと考えられる。</p> <p>いきなり完璧なものを求めるのではなく、段階をおって完成形に近づけていくという方法をとったため、初学者においてもやりやすい方法であったのではないかと考える。</p>				
今後の課題	<p>一部の学生においては、こちらの指摘を改善することを行わず、同じ間違いを繰り返す傾向がみられた。口頭およびレポート上での再度の注意にも関わらず手をぬいたレポートを提出する学生に対しては、成績評価に反映させる等の措置はとったが、本来の科目目的である 2 年次以降の実験への準備という目的が達成されないこととなった。</p> <p>また、受講者 30 名の実験科目を 3 クラス担当しているため、毎週 90 程度のレポートを採点しコメントを書くことになっており、担当者の負担がかなり大きいものとなっている。単純な担当コマ数では評価できない教員の負担がある。</p>				

授業形態	実験	科目名	環境工学実験	必選区分	選択
開講学科・学年	大環3年		受講者数	約80名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を 取り入れたか	<p>この科目は、室内環境の測定法を学び、環境を客観的に評価する力をつけることを目的とした実験実習である。測定機器に表示された数値を安直に信じてレポートを作成しがちであるため、実験の目的をしっかりと理解し、測定値の意味するところを考えさせるよう留意して指導する必要がある。</p> <p>そこで、実験ノートを配布し、板書および口頭説明を基に各自で、背景、目的、方法、生データ、グラフ、考察、まとめを記入させるようにした。前年度までは、実験方法を記載したプリントを配布していたが、H26年度は一切配布せず、授業中の集中力で各自のノートを作成させた。この実験ノートを、毎回の授業終了時に提出させ、内容のチェックや考察に対するコメントを赤ペンで記入して、その場で、あるいは翌週に学生に返却することを続けた。また、実験ノートを基にして、4週おきにレポート提出や研究発表を行った。</p>				
取組みの効果	<p>客観的な観察力や、結果・考察の記述力が回を追って格段に向上した。板書されたキーワードから自分で文章を考えてノートに書くこと、生データを手書きすることを通して、実験目的と結果の関係を理解しやすかったと推察する。レポートや研究発表も、前年度までの比でないほどしっかり取り組んでおり、参考図書として授業中に挙げた本をはじめ、関連論文も自分で見つけて比較考察するなど、自分から積極的に調べており、こちらが驚くほどの成長であった。</p> <p>本科目での取組みは実験ノートの添削を通じた双方向授業であり、当初の目的であった理解を深めることに加え、自分から調べるきっかけにもなったことが効果的であった。</p>				
今後の課題	毎週、添削コメントを入れて返却するには、それだけの時間の確保が必要である。				

授業形態	実験	科目名	染色加工学実験	必選区分	選択
開講学科・学年	大環3年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を取り入れたか	<p>実験授業を開講する際、同じ教員が同じ期に、実験授業と関連した講義とを担当し、実験で行った内容を講義で解説したり、講義で理解した上で実験授業に臨んだりすることで、学生の理解を深める。多くの実験授業は、まず座学で理解を深めた上で、次の期に実験授業を開講するという方式で行われているが、時間が経過することで忘れてしまっていることがあり、教育効果が得られにくいことを改善する試みである。</p>				
取組みの効果	<p>理系が苦手な当学科の学生にとっては、実験を行ってレポートにしっかりした考察を書くのはなかなか大変である。本来なら、自身で調べ、考えて書くということが望ましいが、理解できないままレポートを書くということに陥りかねない中、理解を深めることができている。</p>				
今後の課題	<p>工夫はしているにもかかわらず、なかなか十分な理解に至らない学生もおり、より理解を深めるための改善が必要である。実験科目はレポートで成績評価を行うが、自分自身で書いているかどうかの検証ができないため、授業時間内に書かせることも必要かもしれない。</p>				

授業形態	実習	科目名	建築・インテリア設計Ⅰ	必選区分	選択
開講学科・学年	大環2年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取り組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取り組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取り組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	時間外学習を促す取り組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	学習態度を良くする取り組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を取り入れたか	<p>導入した方法：スタジオ制の導入</p> <p>50人の学生を漫然と複数の教員で指導するのではなく、学生をグループ化し、各グループに教員一名がしっかり対応する。また、すべての学生が複数の教員の指導を受けられるように、課題ごとにグループを担当する教員をローテーションさせた。</p> <p>その意図</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1人1人の学生の抱える課題を、的確に把握し、課題に合わせた指導を行う。 ・比較的消極的な学生や、欠席しがちな学生にも目が行き届く。 				
取り組みの効果	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス全体としてのレベルの向上、特に、平均以下の成績の学生のレベルの向上が顕著であった。 ・教員とのつながりが強まり、全体的な学習意欲の向上が見られた。 				
今後の課題	クラス上位者のさらなるレベルアップのための、方法論の模索。				

授業形態	実習	科目名	建築・インテリア設計Ⅰ	必選区分	選択
開講学科・学年	大環2年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を 取り入れたか	<p>導入した方法：非常勤講師の積極的活用 設計演習の指導に、現在、設計の最前線で活躍している建築家を非常勤講師としてむかえることで、専門的な視点と今日的な視点の両面から学生を指導する。 ただし、非常勤講師にまかせっきりにするのではなく、事前に綿密な打合せを行い、課題ごとの目標や、クリアすべき問題点を専任教員と共有する。</p> <p>その意図 現在、設計の最前線で活躍している建築家の専門的な視点と、今日的な視点に触れる機会を、学生に提供することで、以下のようなことを意図した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学生の設計能力の向上 2. 多様な視点から物事を見る必要性の理解 3. 建築家というロールモデルの提示による、キャリアイメージの明確化 				
取り組みの効果	<p>上記の意図に関して</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 全般的な学生のレベルが向上した。また、成績上位者も、刺激を受け、さらに高いレベルへと向上した。 2. 演習の適切なタイミングで、簡単な講義などを行うことで、課題理解がより深化した。 3. 学外インターンシップへの参加など、自らのキャリア設計に意識的になった。 				
今後の課題	<p>非常勤講師の積極的活用に関しては、考慮すべき課題はないと考える。 むしろ、このように、設計演習においては、非常に意味があり、また、他大学でも率先して実践している。優秀な建築家の非常勤講師化をいかに進めていくか、つまり、より多くの建築家を非常勤講師として招へいし、学生のレベルアップが図ることができるかが課題と考える。</p>				

授業形態	実習	科目名	アパレルコンストラクション実習	必選区分	選択
開講学科・学年	大環2年		受講者数	約70名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	<p>本科目では衣服の製作(大学:キュロットスカート、半袖ブラウス 短大:セミタイトスカート、ノースリーブワンピース)を行うが、作品を手掛けるにあたり、必要な基礎縫い(並み縫い、ぐし縫い、本返し縫い、半返し縫い、置きじつけ、千鳥がけ、端ミシン、裁ち目がかり、ロックミシン、ブランケットステッチ、袋縫い、折伏せ縫い、流しまつり、バイアス布による始末、奥まつり)を課題として出している。その際に過去は教科書と完成見本を学生に提示していた。現在は上記に加えて、動画教材(μ Cam)を提供している。動画教材は、教員及び助手が実際に縫っている様子を撮影したもの、解説のためのイラスト、解説文、写真等である。</p>				
取り組みの効果	<p>平成26年度より学外からもアクセス可能となり、学内のみでの閲覧であったそれ以前よりも利用率が上がり、学生が課題を取り組む際に、有効な教材として使用されている。</p> <p>年度毎に学生が変わる中、比較することは難しくはあるが、動画導入したことで、課題への質問が減ったことや粗雑な作品(基礎縫い課題)が減少したことなどがプラス面として挙げられる。</p>				
今後の課題	<p>当初の目的としては、昨今の針離れによる学生の苦手意識の打破との思いがあった。更に、基礎縫い課題の出来映えや作品の完成度につながる事が目標ではあるが、現時点では年度間比較をする中、当然学生が異なるため、それに関しては明確な結果は得られていない。今後の課題として、それらを強化していきたいと考えている。</p>				

授業形態	実習	科目名	スタイル画実習	必選区分	選択
開講学科・学年	大環2年		受講者数	約40名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> その他（個人指導を徹底する）				
どのような方法を 取り入れたか	<p>スタイル画の学習は週に一回の授業中に描くだけでは、到達目標に達する作品を描けるようになるのは難しい。泳ぎは泳ぎながら覚えると言われるが、デッサンは理論ではなく、実際に鉛筆を手に取って、繰り返し描いていくことで、身体が覚えていくのである。本科目では、このような思想に基づいて、時間外学習として、以下の課題を設けている。（１）宿題：毎回、指示する宿題を次回の授業で提出し、添削して返却された課題はクリアブックにファイルし、ポトフォリオとして就職活動などに活用すること。（２）復習：毎回、提出された課題は教員が赤ペン添削して、合格、または再提出の検印を押し、再提出作品には不合格理由を一筆書いて、次回に必ず返却する。再提出となった課題に、合格するまで取り組んでもらうことにより、個々の学生の描写力の上達を図るように努める。（３）自由課題：授業中に指示した自由課題に取り組み、作品を提出した学生には、一作品につき、1点ずつ加点する。・毎回、授業の課題と宿題の個人指導を行い、提出状況を台帳に記録する。課題集のレベル評価（100点）と作品のレベル評価（200点）および課題の提出状況（100点）を合わせて平均し、総合的に評価（100点）する。</p>				
取り組みの効果	<p>よく「私は才能がないからスタイル画が描けるようになる自信がない。」という学生の声を聞く。このような声に対する答えは「才能の有るなしは忘れましょう。努力が結果を産みますよ。」である。本科目は宿題があり、しんどいという声も聞くが、学期末に提出されたレポートに「宿題を頑張ったので、こんなにスタイル画が描けるようになって嬉しい。」という多くの受講生の感想が書かれている。NDK（日本文化デザイン協会）、KDK（京都服飾デザイナー協会）他のコンテストの応募条件には、スタイル画の提出が義務付けられている。大環および生活造形学科の学生は、これらのコンテストに応募し、例年、受賞している。</p>				
今後の課題	<p>本科目の学習を通して、既製品やプレタポルテの企画や製作、さらに高度化してマスクミ用の版下向けの仕事ができるようになり、そのようなスキルがアパレル企画への就職に繋がることが、今後の課題である。</p>				

授業形態	実習	科目名	住宅・インテリア設計	必選区分	選択
開講学科・学年	大環3年		受講者数	約15名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	<p>背景：生活デザインコースの二級建築士受験要件の科目。このコースの2年次に空間設計の授業がなく、1年後期の空間設計実習終了時から1年以上のブランクがあるため、空間設計のプロセス、単位空間に関する基礎知識、スケール感覚、製図表現方法など、1年次に修得した基礎を忘れていている学生が多い。そのため、1年次に学習した内容を再度、教え込むのに時間が取られ、本来設定している課題に取組める時間が少なくなる。</p> <p>実施した内容：住宅専門雑誌および作品集から、各自が目標とする実際の住宅を取上げ、平面図などの各図を課題と同じ縮尺1/100でトレーシングペーパーにトレースする。更には住宅の特徴を顕著に表している外観、内観写真も合わせてトレースする。トレースの過程では、下記の点に留意する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 建物の中に入り、移動していくイメージを頭の中で描き、写真を参考に空間移動の過程で展開される風景を想像する。 2. 浴室、便所、キッチンなどの基本となる単位空間の寸法を確認し、縮尺1/100でのスケール感覚を身につける。 <p>各自、トレースした住宅の特徴をまとめ、各自で発表する。発表後に各住宅の平面および立体的な構成について教員が解説する。</p>				
取り組みの効果	<p>図面表現のルール、単位空間の基礎的寸法感覚を身につけ、更には住宅における空間のつながりを想像しやすくなったため、以降の設計課題にスムーズに取り組めるようになった。</p>				
今後の課題	<p>トレースの次に住宅設計の課題に取り組むが、最初にトレースした住宅の構成にとらわれ、課題に入っても、トレースした住宅を模倣した作品しか出てこない学生が1割程度出てきた。</p>				

授業形態	講義	科目名	被服整理学 等	必選区分	必修
開講学科・学年	短生 1 年		受講者数	約 70 名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> その他（教員の授業への集中力を高める取組み）				
どのような方法を 取り入れたか	<p>『1 分単位の客観的な出席管理をもとに、効果的な指導を行う』</p> <p>学生が何時何分に教室に入ってきたかを正確に記録することは大変ですが、ピグマを使うとそれが簡単に行えます。マニュアルでも触れられてなく、意外に知られていないようですのでここで紹介します。(OS、バージョンによっては異なるかもしれません。)</p> <p>①タスクバーの出席データアップローダを右クリックし設定を開きます。「かいけつ出席用の打刻データを保存する」(実際にこのメッセージが表示されます)にチェック、保存先を適当に指定しておきます。</p> <p>②それ以後は、ピグマを接続して出席データをアップロードする際に、同時に csv 形式のファイルが PC に作成、保存されます。このファイルは MS Excel などで開きます。</p> <p>③データは、A 列が時刻(セルの書式設定を「数値」などにすると可視化できます)、B 列が学生の学籍番号「MS Excel での変換方法 =VALUE(RIGHT(LEFT(該当セル,10)7))」を示しています。そして、VLOOKUP 関数を使い、MUSES からダウンロードした受講者名簿から、学籍番号を学科、学年、クラス、番号、学生氏名等に変換すれば、学生情報と出席時間が自動的に出力される MS Excel ファイルが出来上がります。(毎回の授業後の確認に要する所要時間は 1 分未満です。)</p>				
取り組みの効果	<p>学生の出席状況が正確に分かれないと、教員の先入観や主観から、誤った指導を行うことへの不安を感じることがあります。ピグマ端末からの客観的な情報から、数値データを取得することで冷静に指導が行えるようになりました。遅刻者への対応時のストレスも感じなくなり、講義に集中できるようになりました。2 時限連続の実験・実習の授業でも活用しています。</p>				
今後の課題	<p>上記のことでは学生の、友人の MIC をかざす、MIC をかざしてすぐに退室する、などの行為は防げませんが、毎回、ミニッツペーパーを課すことで対処しています。興味深い内容が書かれたミニッツペーパーは、次回の授業の冒頭で匿名で読み上げていますが、学生からは好評のようです。</p> <p><注意点></p> <p>①生成された csv ファイルの中身を書き換えたり、上書き保存すると、時刻データが消失することがあります。</p> <p>②担任ガイダンスなど、正課の授業以外で使用すると MUSES の出席管理上にエラーが残ります。(使えれば便利ですので、教務部で検討をお願いします。)</p>				

授業形態	講義	科目名	被服整理学 等	必選区分	必修
開講学科・学年	短生1年		受講者数	約70名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を 取り入れたか	<p>『学外での経験を授業に活かす』</p> <p>普段の研究を授業に還元することをしていますが、大学教員の研究領域は狭く深いものが多いでしょうから、授業の度に毎回活用することは困難だと思います。</p> <p>しかし、企業、公的団体の会員も多い学会等での委員活動では、今まさに社会で問題となっていること、求められていることを知り得ることができ、授業でそのような話題をちりばめることは大変効果的だと感じます。専門性において、学生から信頼されるということは、重要なことだと思います。</p> <p>また、他大学等での非常勤講師の経験も、本学での教育で大いに役立っていると感じます。学力、態度、目標、年齢、性別の多様な学生に接することで、本学の狭い空間、限定された環境では一方向に固まってしまうがちな教育的視野を拡げることができていると思います。そして本学学生の長所短所も見え、指導すべき方針も明確にできます。</p>				
取り組みの効果	<p>学生から好意的な言葉をかけてもらえるようになり、教員として、強い自負を持って授業に臨めるようになりました。</p>				
今後の課題	<p>研究、学会等社会における活動、教育のバランスをとることです。</p>				

授業形態	講義	科目名	繊維学	必選区分	必修
開講学科・学年	短生1年		受講者数	約70名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を 取り入れたか	<p>【専門分野の知識度を確認するための事前テストを実施】</p> <p>学生が、繊維についてどの程度の知識をすでに持っているのかを確認するため、第1回目の授業でテストを実施した。繊維に関する様々な用語（これから授業で頻繁に出てくるもの60用語程度を選定）を羅列し、よく知っていて簡単に説明できるものに○を、説明はできないが聞いたことがあるものに△を、さらに○を付けた中でも詳しく知っている用語6つについて説明するように指示した。また、この授業でどのような力を身に付けようと思うか、衣服に関して興味のあること、知りたいことについても聞き、授業で取り上げる事例や内容に活かすための資料とした。</p>				
取組みの効果	<p>世間で一般的に知られている用語であっても、学生には周知されていないものもあり、教員側と学生側との認識の違いを確認するうえでも大変有効であった。また、用語を知っていても実際に説明ができない場合や具体的な内容までは知らないことも多く、講義の中で解説をより詳しくすべきところを見極める判断材料としても活用することができている。</p> <p>学生にとっては、この事前テストを通して授業で必要になる知識や、授業で何を学び、自分の力にしてどのように活かしたいのかを確認する機会になると共に、具体的に自分はどこまで知っているのか、何をまだ知らないのかも確認することができるため、以降の講義を聞く姿勢にも繋がっているものと思われる。</p>				
今後の課題	<p>今回は初めての試みであり、テスト内容の難易度をあまり高くせずに準備した。中には、かなりの学生が高校までに学んだことがあり、ある程度説明もできるものもあったことから、今回の結果を踏まえて、次回は用語を変更しさらに増やして、より専門的知識度を確認できる内容にしたいと考えている。</p> <p>学生が、これから始まる授業に対して意欲的に、関心を持って学びたいと思わせる第一歩としたい。</p>				

授業形態	講義	科目名	繊維学	必選区分	必修
開講学科・学年	短生1年		受講者数	約70名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ()			
どのような方法を 取り入れたか	<p>【「繊維ニュース」の作成課題】</p> <p>テーマとする繊維（「綿」「羊毛」「ポリエステル」…など）をグループごとに決め、その繊維に関係する最新情報を収集し、それをもとに新聞記事としてまとめ（自身の言葉で文章を作成し、コピペ等は減点対象とすることを指導）「繊維ニュース」を作成する課題を出した。</p> <p>さらに、その内容の要約と各自の意見をプレゼンテーションする機会をつくり、テーマとしている繊維について、市場や生活の中での位置づけ、役割り、汎用性、様々な問題点など、総合的に全員が学べるようにした。また、各グループの記事は印刷して配付し、学生達自身に各記事を審査（興味深いと思うものを選択する等）させることで、すべての記事に目を通すように促し、各自も理解を深めることができるようにした。</p> <p>課題を終えた後は、課題への取組みに対する感想、反省点についてまとめることで、この経験を今後活かせるようにした。</p>				
取組みの効果	<p>必要な情報を収集するためにはどうすればよいか、その情報は信憑性があるのか、どの情報を提供することが他の人にとってより有益であるか、興味深く読んでもらうためにはどのように記事を構成すべきかなど、作成するまでに様々なことを考えて取り組むことで、情報収集力、情報選択力、決断力、文章力、表現力、プレゼンテーション力、協調性など多くの能力を磨いてもらいたい。また、課題に取り組む中で繊維を身近に感じてもらい、興味を持ってより深い知識を習得することに繋がることを期待している。</p>				
今後の課題	<p>課題を終えた後に、課題への取組みに対する感想、反省点についてレポートと共に提出してもらい、その内容を踏まえて次年度におこなう課題の改善に繋げたい。また、次年度は課題にもう少し重心をおいた授業計画を検討したいと考えている。</p>				

授業形態	講義	科目名	アパレル材料学	必選区分	必修
開講学科・学年	短生 1 年（アパレルコース）		受講者数	約 80 名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他（ ）				
どのような方法を 取り入れたか	<p>アパレル材料学の基礎となる糸、織物、編物、その他の材料について、基礎知識と、それを日常の衣生活やアパレル関係の職に就いたときに応用できる能力を養うために、下記のようなことを取り入れた。</p> <p>◆単元終了ごとに小テスト形式で復習を行って、各自の理解度をチェックするとともに、問題について解説し、その内容について理解度の向上を図った。</p> <p>◆織物組織図の設問については、机間巡視による確認、および学生の挙手により質問を受け、理解不足や不明な点を個別に説明・指導した。</p> <p>◆できるだけ多くの糸・織物・編物などの実物サンプルを持参し、拡大投影して説明するとともに、多くのサンプルを回覧して、実際にそれを見たり触れたりすることにより、関心や理解が深まるようにした。</p> <p>◆基礎力向上と関連事項の関心を深めるために、レポート課題を与えた。</p>				
取り組みの効果	<p>◆小テストを行うことの予告により、真面目な学生は確実に復習をし、理解が深まっている。また、質問も増えている。</p> <p>◆授業時間外の予習、復習を殆どしない学生についても、小テストの途中から教科書を見ての解答を許可することにより、自分の理解度を自覚するとともに、教科書の内容の熟読につながっている。</p> <p>◆レポート課題について、調べたり作業をすることにより、少なくとも被服材料への関心や理解度が増したと思われる。</p>				
今後の課題	<p>当該科目は必修科目、教員免許（家庭科）の教科科目、テキスタイルアドバイザーの資格認定科目であるため、課せられた科目内容の講義が必要となる。授業が 15 週になってからは、小テストによる振り返りができるようになり、机間巡視で質問に答える週を設けているが、今後、もう少し双方向の取り組みを加えることができると思われるので、工夫をしていきたい。</p>				

授業形態	演習、 実験 等	科目名	初期演習、染色加工実験 等	必選区分	必修、 選択 等
開講学科・学年	短生1年		受講者数	約40名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> その他（失敗事例集）				
どのような方法を取り入れたか	<p>私の失敗事例です。備忘録のようなものですが、本学学生の特質とも関係するかもしれませんが、ご参考になれば幸いです。</p> <p>①『科学実験での模範レポートの提示』 毎回の実験レポートでクラスで最も優秀なものをコピー（個人名は消去）し、レポート返却時に教室入口付近に張り出したが、ほとんど誰も見ない。</p> <p>②『教員個人の研究の文章の配布』 学会誌等の原稿のコピーを研究室前で「どうぞ自由に」と自由に取れる形にしているが、1年間で1枚も減らなかつた。卒業研究の配属を志願する学生にさえも、興味を示してもらえていない。</p> <p>③『短大の初期演習でのワールドカフェ等の非友人間ディスカッション』 就職・進学・結婚や専門分野の学びのことなどを題材に、近年流行のディスカッション手法を取り入れようと何度か試みたが、友人とだけ私語をする学生、動こうとしない学生が少なからずおり、なんとか始めさせても私語や内職、イラスト描きなどをする学生が絶えず、議論に熱気はなく、効果的ではなかつた。（3年前）</p>				
取組みの効果	<p>③については、昨年度は非友人間の議論は取りやめ、学生が何をすべきかが明確な課題を複数回提示し、複数回プレゼンテーションをさせた。（年間4回ほど。プレゼンテーションの評価には学生の投票、コメントも取り入れた。）グループ課題については、友人同士を引き離さず、学生の自主性に任せて自由にグループを組ませて課題をさせた。その結果、初期演習の1年間を通して手を抜く学生が少なかつたように感じた。</p>				
今後の課題	<p>①②については、成績上位者が能動的に学び、主体的に学術研究を行う姿勢を身につけてほしいので、次の方法を考案するまでは、目に見える成果がなくても継続したい。</p>				

授業形態	実験	科目名	福祉住環境論・同実験	必選区分	選択
開講学科・学年	短生2年		受講者数	約40名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	<p>・2限連続の講義時間を、基本的に、前半に講義、後半に実験・検討時間とし、実験では講義で学んだ内容に関する実験を実施することにより、授業内容を体得できる様にしていく。</p> <p>・実験内容は、毎回テーマを決めて完結しているが、実施した内容は、以後の実験やレポート作成時に参考にできる様に関連づけている。</p> <p>・班で分かれて実験し、得られた結果を班で検討する時間を設けている。更に、いくつかのテーマは班ごとに発表（全員必ず発表）し、他の班の意見も参考にできるようにしている。</p>				
取り組みの効果	話を聴くだけでなく、実際に色々と実験し、得られた結果に関して議論し発表することにより、より理解が深まっている様である。				
今後の課題	現在、実験できていない内容に関しても、実施できる様に検討する。				

授業形態	実習	科目名	アパレルコンスト実習Ⅰ	必選区分	選択
開講学科・学年	短生1年		受講者数	約30名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	<p>本科目では衣服の製作(大学:キュロットスカート、半袖ブラウス 短大:セミタイトスカート、ノースリーブワンピース)を行うが、作品を手掛けるにあたり、必要な基礎縫い(並み縫い、ぐし縫い、本返し縫い、半返し縫い、置きじつけ、千鳥がけ、端ミシン、裁ち目がかり、ロックミシン、ブランケットステッチ、袋縫い、折伏せ縫い、流しまつり、バイアス布による始末、奥まつり)を課題として出している。その際に過去は教科書と完成見本を学生に提示していた。現在は上記に加えて、動画教材(μ Cam)を提供している。動画教材は、教員及び助手が実際に縫っている様子を撮影したもの、解説のためのイラスト、解説文、写真等である。</p>				
取り組みの効果	<p>平成26年度より学外からもアクセス可能となり、学内のみでの閲覧であったそれ以前よりも利用率が上がり、学生が課題を取り組む際に、有効な教材として使用されている。</p> <p>年度毎に学生が変わる中、比較することは難しくはあるが、動画導入したことで、課題への質問が減ったことや粗雑な作品(基礎縫い課題)が減少したことなどがプラス面として挙げられる。</p>				
今後の課題	<p>当初の目的としては、昨今の針離れによる学生の苦手意識の打破との思いがあった。更に、基礎縫い課題の出来映えや作品の完成度につながる事が目標ではあるが、現時点では年度間比較をする中、当然学生が異なるため、それに関しては明確な結果は得られていない。今後の課題として、それらを強化していきたいと考えている。</p>				

授業形態	実習	科目名	アパレルコンスト実習Ⅰ	必選区分	選択
開講学科・学年	短生1年		受講者数	約20名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ()				
どのような方法を取り入れたか	製作を行う実習科目では、一度のミスが大きく進度が遅れることにつながり、学生のモチベーションを一気に下げる原因になりやすい。そのため、特に入学直後に開講されるこの科目では、その年度の学生の資質を見極めながら、先回りをしてミスを避けるように誘導するような指導方法を取る年度がある。				
取り組みの効果	ミスを回避できれば学生のモチベーションを維持することはできる。 しかし、自分で十分に確認しなければいけない、起こりそうな事象を予測しなければいけない、という意識が低くなり、新しい課題に挑戦する際に、自分で問題点を見つけ出す力を身につけさせるのが難しいと感じる。				
今後の課題	なぜそのようなミスが起こるのか？この方法をとればなぜミスが防げるのか？他にもっと良い方法は無いのか？他に同じようなミスが起こる可能性が高い箇所は？など、学生本人が考えることができる機会と時間を確保すること。				